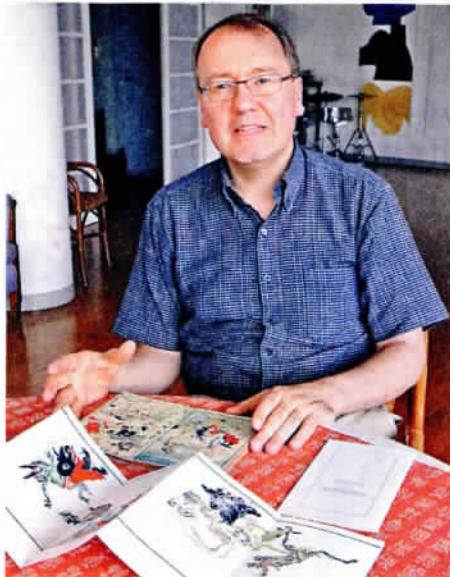


海越えて伝わる魅力



暁斎が海外で受け入れられた歴史を語る
マルケさん=東京都内

クリストフ・マルケ 1965年フランス生まれ。日本近世・近代美術史と出版文化史が専門。フランス国立東洋言語文化大教授。編著に「日本の文学文化を探る――日仏の視点から」など。2015年に欧米で初めて大津絵を研究した著書を出版。

奇想の絵師、河鍋暁斎の名声は海を越えてヨーロッパにも伝わった。19世紀末のフランスでは日本の代表的な画家として北斎に次いで称賛されていた。江戸・明治の絵画に詳しいフランス人の美術史家として、日仏会館フランス事務所長のクリストフ・マルケさんが暁斎が海外で評価された歴史をひもといた。(文化部・田尻秀幸)

暁斎を語る

下

日仏会館フランス事務所長

クリストフ・マルケさん

「暁斎は大英博物館で展覽会が開かれるなど、日本以上に海外で評価された。」

「暁斎が初めて評価されたのはフランスです。1876(明治9)年に、日本の宗教を調査しようと、実業家のエミール・ギメと画家のフェリックス・レガメが来日しました。」

「パリでは北斎が有名だったこともあり、実際に日本で活躍している画家に会おうと暁斎を訪ねたのです。」

「どんな風に彼らは暁斎を知ったのか。批判した作品と受け止め、宗

教の権威に屈しない反骨精神のある画家として興味を持ったのです。基になったのはこ

とわざですから、小さな誤解

作者名知らずとも感動

から始まったと言えます」

「フランスは風刺画の伝統が根強い。特に当時のフランスでは、どの新聞にも風刺画が載っていました。権威に立ち向かう陀の光も金次第」という日本のことわざを描いたものでした。彼らは形骸化した仏教を

守った。当時の美術史家ルイ・ゴンスは『私から見ると、彼の最も偉大なところは、ヨーロッパにはかぶれず日本的な美意識を全うしたことにある』と言っています」

「どれほど人気があったのか。『した』と語っているようです。確かに舌禍事件などで牢獄に入ってはいるのですが、これは大げさですね(笑)。いろいろな誤解があったかもしれませんけれど、彼らにとって暁斎は印象的な画家だった。帰

国後のギメは著書『日本散策』で数ページにわたって暁斎を紹介し、フランスでの知名度を高めました。自身が設立したギメ美術館にも暁斎の絵を収蔵しています」

「フランスではどんなところが魅力的だったのでしょう。」

「文明開化の時代ということもあり、日本では西洋の技術が美術にも輸入された。フランス人に当時の日本人の絵

は模倣のように見えたでしょう。でも暁斎は日本の伝統を守った。当時の美術史家ルイ・ゴンスは『私から見ると、彼の最も偉大なところは、ヨーロッパにはかぶれず日本的な美意識を全うしたことにある』と言っています」

「フランスではどんなところが魅力的だったのでしょう。」

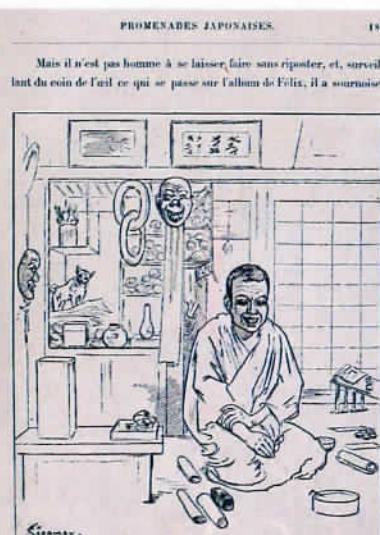
「『百鬼画譚』は暁斎にとつて最後の作品。色彩も斬新で、日本画家の訃報が掲載されるのはとても珍しい」

「マルケさんは暁斎最晩年の遺作となつた『暁斎百鬼画譚』を仏訳して復刻させてい

ます」

「上」は2日、「中」は9日

前期展18日まで



「日本散策」で描かれた暁斎

「鬼才――河鍋暁斎展 幕末と明治を生きた絵師」 前期展は18日まで。後期展は20日~8月7日。月曜休館。開館時間は午前9時半~午後6時(入室は同5時半まで)。観覧料は一般1200円、大学生900円。県水墨美術館と北日本新聞社でつくる実行委員会、河鍋暁斎記念美術館主催。